

戦国時代、大名は有能な人材を側近くに置き、彼らの献策を取り入れて、内政・外交など様々な政策を実行していきました。こうした人物の中で特に優れた者は「軍師」などと呼ばれ、今話題の黒田官兵衛もその一人に挙げられます。

今回の資料展示では、当館所蔵資料の中から、その黒田官兵衛にアプローチしてみます。

【黒田官兵衛ってどんな人？】

始め孝隆、後に孝高（よしたか）と名乗る。官兵衛、後に勘解由次官（かげゆのすけ）と称し、天正17年（1589）に隠居して如水（じょすい）と号す。

天文15年（1546）播磨国（現兵庫県）姫路で生まれる。織田信長に従った後、その命を受けて播磨国に出陣してきた羽柴秀吉に属し、毛利氏やそれに通じた別所氏（播磨国三木城主）との戦いに尽力した。この間、天正6年（1578）には、信長の家臣で摂津国（現大阪府）を任されていた荒木村重（あらかきむらしげ）が離反したため、説得を試みるも城内に幽閉された。村重の居城・有岡城の開城時には救出され、再び秀吉の許に戻る。毛利氏と対陣した備中国（現岡山県）の高松城における水攻めは、官兵衛の提案とも言われている。

本能寺の変（天正10年＝1582）の後、天正13年（1585）の四国の長宗我部氏攻め、天正15年（1587）の九州の島津氏攻め、天正18年（1590）小田原の北条氏攻めなど、秀吉による天下統一事業においては常にその側において、大いに秀吉を支えた。そうした功績により、天正15年には、豊前国（現福岡県）において12万5千石を与えられ、中津を居城とした。

秀吉の没後に勃発した関ヶ原の戦い（慶長5年＝1600）に際しては国元にあった。当時、主力は嫡男・長政が率いているため、残った家臣と新たに集めた兵力を巧みに動かして北部九州を転戦、西軍に属した大名を攻めると共に、混乱に乗じて旧領である豊後国（現大分県）の回復を目論んだ大友義統（おおともよしむね）との戦いで勝利するなど、秀吉を支えた戦上手の手腕を存分に発揮している。

関ヶ原の戦いの結果、長政が筑前国（現福岡県）を与えられたためそれに従ったが、慶長9年（1604）、京都の伏見において病没した。享年59歳。

時流をよく見極め、信長・秀吉・家康といった天下人との関係を密にして、筑前国福岡藩52万石の礎を築いた人物である。



①黒田孝高書状 (天正 14 年=1586 年) 1 1 月 1 0 日 奈古屋家文書 41

徳山藩の家老の家柄である奈古屋家に伝わった官兵衛の書状です。「なごや河内」に対して長期間の在番を労ると共に、「時枝」という人物が人質を出したことから、引き上げてよい旨を伝えています。

この文書については、後年、奈古屋豊敬が、詳細は不明ながら、天正 1 4 年との年代比定を行っています。

【展示期間】 8 月 1 日 (金) ~ 8 月 10 日 (日)

②小早川隆景書状 (天正 14 年) 5 月 2 日 毛利家文庫遠用物中世 105-1

肥前国 (現佐賀県) の龍造寺氏の使者、豊後国 (現大分県) の大名・大友宗麟 (義鎮)、薩摩国 (現鹿児島県) の島津氏の使者が相次いで大坂を訪れていたことが窺えます。特に島津・大友両氏は、秀吉による仲裁案についての折衝を続けていました。

書状の後半では、黒田官兵衛の派遣について触れています。西日本の統一に向けて、毛利氏も含めた秀吉の軍隊がいよいよ九州へ向かいます。

【展示期間】 8 月 12 日 (月) ~ 8 月 20 日 (水)

③吉川元春書状 (天正 14 年) 9 月 2 5 日 阿川毛利家文書 1

吉川元春が、次男仁保元棟に宛てた書状。展示部分には、島津攻めのために黒田官兵衛が毛利氏の許を訪れ、小早川隆景らと渡海の時期等を協議していることが記されています。また、九州の戦況にも触れています。例えば、秀吉の命を受けた土佐国 (現高知県) の長宗我部元親・讃岐国 (現香川県) の仙石秀久ら四国勢が、秀吉に従った豊後国の大友氏の許へ到着していること、大友氏の家臣である立花宗茂らが島津氏に頑強に抵抗していることなどです。加えて、一度島津氏に敗れた筑紫広門は、旧臣を募って旧領の奪還に成功した模様です。戦況が刻々と変化する北部九州の様子が詳しく記された書状と言えるでしょう。

【展示期間】 8 月 21 日 (木) ~ 8 月 28 日 (木)